

お菓子のおまけ カバヤ文庫『里見八犬伝』―典拠は何か―

山本 貴恵

一、はじめに

カバヤ文庫¹は岡山のカバヤ食品株式会社がキャラメルのおまけとして発行した書籍であり、第一巻第一号『シンデレラひめ』（昭和二十七年八月三日）が出された後、昭和二十九年の第一二巻第一五号までに週刊ペースで全一五九号²が発行され、発行総部数は二五〇〇万冊だと言われている³。

そのキャラメルのおまけとして人気を博したカバヤ文庫の中の一冊に『里見八犬伝』（第六巻第二号、カバヤ児童文化研究所、昭和二十八年四月⁴）がある。

カバヤ文庫はキャラメルのおまけであることから、従来の児童文学研究においては十分な研究がなされておらず、カバヤ文庫に関して書かれたものは、カバヤ文庫の編集者であった原敏の他、先行研究としては坪内稔典⁵、岡長平があるのみである。そのような状況であるため、先行研究の中で一つの作品に関し、典拠まで遡り研究

したものはない。

近代における『八犬伝』受容史を解明するに当たって、カバヤ文庫が当時、高い享受を得てきたことを考えれば、児童文庫『里見八犬伝』を研究することは非常に価値のあることであるといえる。

本稿ではまず第二章でカバヤ文庫について及びカバヤ文庫『里見八犬伝』の書誌について紹介をし、その後、三章、四章と再話、挿絵の特徴とその典拠について遡及的に探っていくものである。

カバヤ文庫がお菓子のおまけという性質をもつ以上、カバヤ文庫の作者、画家たちが、大変長い作品である『南総里見八犬伝』のテキストを時間と労力をかけて読み、独自に創作したのであるうか。

カバヤ文庫の作者及び画家については第二章、三章にて後述するが、独自に創作したとは考えにくい。

本稿ではこれらの仮説の元、カバヤ文庫の作者たちが一体、何を典拠とし、執筆、あるいは描いたのか。さらにその元になった典拠の源までを遡っていくことで、近代における『八犬伝』受容史の一

端を解き明かすことを目的とする。

さらに四章では、カバヤ文庫の読者投稿欄の内、『里見八犬伝』のものを紹介し、その特徴を考察していく。それによって昭和三〇年前後の『八犬伝』の享受の一側面を明らかにすることが可能となる。

二、カバヤ文庫『里見八犬伝』書誌

カバヤ文庫について回想しているものに次のようなものがある。

キャラメルの中にターザン一家やカバのカードが入っていて、これを集めると一冊もらえた。本などなかなか買ってもらえなかったところだから、これは子どもたちの大人気になった。子どもだけではなく学校も熱をあげた。なにしろ軍国主義の本はだめだというわけで、戦前の本はほとんどを処分したあとだったから、どこの学校も図書室はがら空きで、学級ぐるみ、学級ぐるみでカード集めに取り組んだ⁶。

架蔵本であるカバヤ児童文化研究所の児童文庫『里見八犬伝』(第六卷第二号)は、縦一八・五センチ、横一三センチ、厚さ一・五センチ。B6版のハードカバー。ボール紙を上質紙で包み、表紙は見返しの紙によって針金でとじられ本体に付けられている。

発行は昭和二八年四月七日。定価は一二〇円。

表紙は伏姫と八房の絵であり、本文の頁数は一二五頁である。裏表紙の左下には「小学校4・5・6年生向」と記載されている。作品の内容は、伏姫が役行者に出会う場面から始まり、八犬士が里見家に出陣するまでが簡潔に描かれている。

はしがきには京都大学教授の野間光辰の署名が記載されている。以下、一部分を引用する。

皆さん、ここにやさしい現代の言葉に書き直された『里見八犬伝』は、十九世紀の大小説家滝沢馬琴の原作で、全部で九輯百六巻、世界でも数少ない絵入りの大長篇小説です。勿論長さだけが小説の価値を決めるというわけではありません。戦乱打続く室町時代、里見家の八勇士が主家再興のために活躍するといふ、波瀾曲折に富んだ物語がくりひろげられ、その規模の大きさ文章の麗しさ、たしかに我国の小説の代表的名作といつても決して言い過ぎではありません。

坪内によると、このはしがきについて編集者の原敏は「大半は署名をもらうのみで、本文は自分たちで用意して目を通してもらったものだ⁷」と語ったという。

『里見八犬伝』巻末の「あとがき」は以下のようなものである。

皆さんの目に、しみいるように美しく映える色とりどりの花も、

みどり濃い木々の茂みも、自然のゆたかな恵みをうけてあんなに幸福そうにかがやいているのです。カバヤの児童文庫を可愛がって下さる皆さんも、きつとほおはばら色にかがやいて、目は星のようにきらめいているでしょう。世界のすぐれたお話は、皆さんの心にゆたかな恵みの光をふりそそいでくれるでしょうから。

「皆さん」から始まる文章の書き方から「はしがき」と「あとがき」では、どこことなく似た印象を受ける。

それ以外に関してはどうであったかという点、坪内によると、「書目の選定、題名の決定などは、この文庫の企画者であり推進者でもあった原敏によってなされたが、作品の書き直し（リライト）は、京都の大学院生や高校教師によって行われた。」らしい。

さらに原敏は作品の執筆者に関して次のように語っている。編集部で希望を募り、「その中から小学校の女性教員を中心にした「童話愛好グループ」、ラジオ放送のシナリオ研究の集まり、そのほか数名の単独の依頼者を決め」という¹⁰。

雇用条件として、「四〇〇字詰め原稿用紙一〇〇枚で一本として執筆料二万円。」「但し、「作」の「画」もあくまで無名。「カバヤ児童文化研究所編集部」にすべて帰属ということにした。」¹¹。そうである¹¹。

原はカバヤ文庫制作に際し、製作費の削減のため、「世界の名作、つまり著作権の切れたものを使う」ということ¹²。にし、「それも、す

でに出ているものを焼き直したり、リライトするのではなく、原作の持ち味を壊さずに執筆者の自由な書き方に任せよう」との思いだったという¹²。

しかし、アルバイト作者たちが『八犬伝』の原作を読むことはおろか、同時代のテキストを読んで自分なりに児童向けの作品として再話したとは考えにくい。

坪内が「その際、参考にした本があったにちがいないが、それは何だったか¹³。」と述べているように、既に児童向けに出されている作品を参考にして書いたのではないか。それも児童向けの全集として出されているものを見るのが手っ取り早い方法であろう。

『里見八犬伝』は大変な長篇であり、まとめるだけでも大変な労力を伴う。さらに児童向けに再話するとなると、さらなる手間がかかることが想像される。アルバイト作者たちがそのような大変な労力を注ぐことは想像し難い。

三、再話の典拠

カバヤ文庫の作者たちが既に出ている児童向けの全集を参考にしたと考えた場合、まず想定されるものは何であろうか。

坪内は「昭和二十五年にステイヴンソンの『宝島』からはじまった「岩波少年文庫」、あるいは同年に『ああ無情』からスタートした講談社の「世界名作童話全集」などであろうか¹⁴。」と述べている。

岡長平によれば、カバヤ文庫と講談社の「世界名作全集」（昭和二五〜三七年、全一八〇巻）、偕成社の「世界名作文庫」（昭和二五〜三十一年、全一四〇巻）の「三者を比較する」と、「共通する作品は約四十点に及ぶ」という¹⁵⁾。

それぞれの全集の『里見八犬伝』はと言えば、「岩波少年文庫」に『里見八犬伝』は存在しないのであり得ない¹⁶⁾。講談社の「世界名作全集」は山手樹一郎『八犬伝物語』（世界名作全集50）、講談社、昭和二九年二月）があり、偕成社の「世界名作文庫」にも加藤武雄『里見八犬傳』（世界名作文庫、偕成社、昭和二六年一月¹⁷⁾）がある。

講談社版の山手樹一郎『八犬伝物語』はカバヤ文庫『里見八犬伝』（昭和二八年四月）よりも後に発行されたものであり、参考にするのは不可能である。となると、カバヤ文庫『里見八犬伝』の作者にとって、偕成社の加藤武雄『里見八犬傳』はその当時の最新の児童全集であり、時期が近いだけに入手もしやすく、この本を参考にした可能性が高いといえる。実際に中身を見てみると、参考にしたとしか思えないほどの共通点がある。

カバヤ文庫『里見八犬伝』の見出し題と加藤武雄の『里見八犬傳』の目次を比較すると次の様である。

※（ ）内の数字は始まりの頁数を表す。

共通する部分は、傍線を付した。

加藤武雄『里見八犬傳』目次

龍と鯉（一四）

金碗八郎と毒婦玉梓（二九）

豪犬八房（二九）

伏姫の死（三七）

宝刀村雨丸（四五）

孝子犬塚信乃（五一）

犬川莊助の生立（六一）

悪党墓六（六六）

すりかえた村雨丸（七三）

浜路の死（七九）

決戦芳流閣（九一）

犬田小文吾（九八）

房八の義侠（一一一）

神かくし（一二九）

額蔵危うし（二二六）

戸田川の義人（二三三）

道節謀らる（二四一）

荒芽山の決闘（二四九）

悪婦船虫（二五五）

女田楽且開野（二六四）

庚申山の怪猫（二七四）

カバヤ文庫『里見八犬伝』見出し語

伏姫の死（四）

名刀村雨丸（二八）

牡丹の花の痣（二四）

悪党墓六（三〇）

浜路の死（三七）

決戦芳流閣（四六）

房八の義侠（五八）

額蔵危し（六六）

道節謀らる（七二）

悪婦船虫（八一）

女田楽且開野（八八）

庚申山の怪猫（九二）

怪猫たおれる (二八二)

木工作の娘 (一八八)

偽代官の奇智 (二九五)

小文吾猛牛と戦う (二〇七)

小文吾、莊助の危難 (二二四)

囚われの二大士 (二二二)

伏姫の加護か (二二八)

卜師物四郎 (二二二)

毒婦船虫の最後 (二二九)

鈴ガ森の合戦 (二四〇)

忠臣河鯉守如 (二四五)

怪傑臺田素藤 (二五一)

八百比丘尼妙椿 (二五六)

大江親兵衛仁の出現 (二五九)

少年將軍 (二六三)

化け狸 (二七〇)

不思議なできごと (二七四)

政木狐 (二七九)

怪猫たおれる (九七)

占師物四郎 (二〇三)

鈴ガ森の合戦 (二〇八)

怪傑臺田素藤 (二一三)

少年將軍 (二一八)

八大士の出陣 (二二二)

カバヤ文庫の見出しの語の総数は一八あり、その内の一六が加藤武雄『里見八大傳』の目次と重なる。

さらに本編の最終部分を比較してみると次のようである。以下、順に引用する。

加藤武雄『里見八大傳』

さて、八大士は、各従六位下に叙せられて、

大江親兵衛仁は兵衛尉に、

大阪毛野胤知は下野介に、

犬塚信乃成孝は信濃介に、

大川莊助義任は長狭莊介に、

犬山道節忠与は帯刀先生に、

犬村大角礼儀は大学頭に、

大飼現八信道は兵衛佐に、

大田小文吾梯順は豊後介に任ぜられた。

そして、八大士は、里見安房守義成の下に、各々上太夫に任ぜられ、また、おのく一万貫の領地を与えられて、城主となつた。上太夫というのは、家老の上席で、重家老ともいふべき役目である。さらに、八大士は里見の娘と結婚することになった。犬塚信乃が第五の姫浜路姫、犬村大角が第三の姫鄙木姫を妻としたことはいまでもない。(おわり) (二九三)

カバヤ文庫『里見八犬伝』

さて、八犬士は、それぞれに従五位下の位をもらって、

大江親兵衛仁は兵衛尉に、

大阪毛野胤智は下野介に、

犬塚信乃成孝は信濃介に、

大川荘助義与は長狭介に、

大山道節忠与は帯刀先生に、

犬村大角礼儀は大学頭に、

犬飼現八信道は兵衛佐に、

犬田小文吾悌順は豊後介にと任せられた。

そして、八犬士は、里見安房守義成のもとに、それぞれ上太夫の位をもらい、またおのおの、領地を与えられて、城主となった。上太夫というのは、家老より上席で、重家老といってよい職務であった。

さらに、八犬士は、里見家の姫君と、それぞれ結婚して、幸福な身の上となることができたのであった。

—おわり(二二四、二二五)

カバヤ文庫の方が少し分かり易い言葉で書かれているものの、ほぼ同じであることが確認できる。特に八犬士の身分について説明がされている箇所では、文章の書き方まで同じであり、加藤武雄『里

見八犬伝』を参考に書かれたことは明白である。

加藤武雄の『里見八犬伝』の本編総数が二六五頁。対してカバヤ文庫『里見八犬伝』は一八八頁。つまり、およそ半分近く縮める必要がある。そのような紙幅の制約があるために、加藤武雄『里見八犬伝』のうち、個々の八犬士のストーリーから八犬士全員が集うまでの場面を掻い摘んで作成した様子が伺える。

以上のことからカバヤ文庫『里見八犬伝』の作者が偕成社の加藤武雄『里見八犬伝』を底本として作成していたことが明らかとなった。

加藤武雄は『里見八犬伝』の巻末、「八犬伝を讀む人に」の初めの一文で、「馬琴の文章のおもしろ味は、原作を読まないとわからない。」(二九四)と述べた上で、原作の一節(芳流閣上の場面)を引用している。そして最後の一文には「みなさんも、大人になつたらぜひ、馬琴の原作をご一読なさいと、私は、心からそれをおすすめする。」(三〇五)と結んでおり、原作の素晴らしさを述べて読むことを薦めている。

途中では、「馬琴のえらいところは、文章よりもしくみにある。」(二九五)と述べた上で次のように語っている。

あの玉でも、どんなふうにして手に入つたか、また痣はどうしてできたか、ちやんとその由来を書いて、いゝかげんにごまかしたところは一つもない。—私の書きぢぢめたこの本では、いくつかさういふところがあるかも知れないが、それは、みじ

かくするために、略したからで、馬琴の原作には、そんなところはない。(二九五、二九六)

加藤武雄は児童向け『里見八犬傳』を書く以前に、ダイジェストである『八犬傳物語』(新潮社、昭和二十年十月)を書いているから、確かに原作を読んでいたのだろう。

加藤武雄『里見八犬傳』は、自作のダイジェストである『八犬傳物語』を元に書かれたものと考えられ、そのダイジェストは原作を読んだ上で書かれたものだと考えられる。

しかし、これだけよく似ている偕成社版『里見八犬傳』とカバヤ文庫の『里見八犬傳』のストーリーに相違がある箇所がある。

それは、古那屋で破傷風にかかった信乃が後の八犬士の一人である親兵衛の両親、房八と沼蘭夫婦の法螺貝にのせられた生き血を傷口に注がれたことよって無事に生還する場面、若い男女の生き血を傷口に注ぐという民間療法が行われる箇所である。(原作だと、第四輯巻之四の第三七回「病客薬を辞して齢を延ぶ 俠者身を殺して仁を得たり」)

加藤武雄『里見八犬傳』ではこの場面はその通り忠実に描かれているのに対し、カバヤ文庫では民間療法は行われず、破傷風の薬を買いに行った現八が戻ってきて、その薬を飲むという設定になっている。

これまで見てきたように、ほぼ『里見八犬傳』そのままに創作してきて、ここだけカバヤ文庫の作者のオリジナル創作とは考えにく

く、同じ設定の作品が他にもあるはずである。

同じ箇所があるものが何かあるかというと、高垣眸『里見八犬傳』上巻(日本名作物語、講談社、昭和一六年九月)がある。高垣眸『里見八犬傳』上巻も、現八が戻ってきて信乃が破傷風の薬を飲み生還する設定になっているが、このような設定になっているのは、カバヤ文庫以前に発行された児童向け『八犬傳』では、管見に及んだ限り¹⁸、高垣眸『里見八犬傳』上巻しか見当たらない。どうやらカバヤ文庫の作者は高垣眸『里見八犬傳』上巻を参考にしたようである。

カバヤ文庫の作者はこの二冊の児童向け全集の『里見八犬傳』を読み比べた上で、高垣眸『里見八犬傳』上巻の方がこの場面においてはより適切だと判断したのだろう。

以上のことから、カバヤ文庫『里見八犬傳』の作者は、加藤武雄『里見八犬傳』を大幅に参考としながら、一部、高垣眸『里見八犬傳』上巻も参考にしたようである。しかし、まだ一つ疑問が残る。

カバヤ文庫は紙幅の制約があるため、始まりが「伏姫と八房」からとなっている。前述の如く話の結末が加藤武雄の『里見八犬傳』と酷似しているが、話の冒頭部分に関しては始まりが違いため、新たに考える必要がある。やはり冒頭に関しても、一から創作するとは考えにくい。何かこれも既に発行されているものを参考にしていたのではないかと見渡してみると、藤川淡水『お伽八犬傳』(以文館、明治四五年一月¹⁹)が挙げられる。

『お伽八犬傳』の冒頭部分とカバヤ文庫『里見八犬傳』の冒頭部

分を比較すると次のようになる。

以下、順に引用する。

藤川淡水『里見八犬傳』

今はむかし、五百年前、安房上總の國主、里見治部大夫義實朝臣に伏姫と云ふ一人のお姫様がりました。襦袢の中から世にも稀な、美しいお姫様でありましたから、御兩親は、掌の珠よりも大切にお育てになりましたが、何うしたものか、伏姫は三歳になつても物も云へず、朝から晩まで泣きむつがつて、御兩親の御心配は云ふも更なり、國中の人々までも大層心を痛めて居りました。(一)

カバヤ文庫『里見八犬伝』

今から、五百年ほど昔のお話である。

安房の国(今の千葉県の一部分)に、里見義実という大将がいた。義実には、伏姫という、まことに可愛らしい女の子があつたが、どうしたことか、この伏姫は、三才になつても、口がきけないで、笑うこともしない。ただ泣いているばかりであるのであつた。(四)

冒頭部分がよく似ている。冒頭部分以降は、例の如く加藤武雄『里

見八犬伝』とほぼ同じである。こちらもやはり管見に及んだ限りでは「五百年前」と書かれている児童向けの作品は藤川淡水『里見八犬伝』のみである。藤川淡水は『里見八犬傳』の「序」の中で、「殊に八犬傳の原文は子供にも解り難い。これをお伽風に書きつゞつたら、子供の讀物として至極結構であらう」(「序」二)と述べており、そのためこのような「今はむかし、五百年前」と始まる書き方にしたようである。

以上のことからカバヤ文庫の作者は、加藤武雄『里見八犬傳』を底本としつつ、その他、高垣眸『里見八犬傳』上巻、藤川淡水『里見八犬傳』も適宜参考にしていたと結論付けられる。

再話の典拠に関する調査の結果を整理すると、以下の通り。

(底本) 加藤武雄『里見八犬傳』↓『八犬傳物語』↓**原作**

カバヤ文庫 **△**(改変部分) 高垣眸『里見八犬傳』上巻

(冒頭部分) 藤川淡水『お伽八犬傳』

ジャンルで記すと、次の通りである。

カバヤ文庫↓児童向け全集↓ダイジェスト↓**原作**

四、挿絵の典拠

カバヤ文庫『里見八犬伝』の挿絵の方はどうであろうか。

原敏は「挿絵の方は、京都はさすが文化の都、イラスト書きがゴロゴロしており、それを束ねるものが出て、表紙がカラーで一万円、本文中のものも一円で依頼²⁰。」と語っている。

カバヤ文庫『里見八犬伝』の挿絵に原作の絵を踏襲した様子は見られない。やはり挿絵画家に関しても、何か既に出ている児童向けの作品を参考にしたのではないだろうか。

その際に手本としたものは何であったのだろうか。

カバヤ文庫の挿絵は表紙、扉の絵の他、本編の絵は計、一四枚。挿絵の箇所を記すと、以下の表の通り。

表紙 伏姫と八房
扉 伏姫と八房

本文挿絵 計一四枚。

挿絵	頁数	見出し語
一	六	伏姫と八房
二	一〇	伏姫と八房
三	一七	伏姫の死
四	二三	名刀村雨丸
五	三四	悪党墓六
六	三九	浜路の死
七	五〇	決戦芳流閣
八	六〇	房八の義侠
九	七一	額蔵危し
一〇	七八	道節謀らる
一一	八四	悪婦船虫
一二	九六	庚申山の怪猫
一三	一一〇	鈴ガ森の合戦
一四	一二〇	少年將軍

見出し語の総数一八に対し、挿絵が描かれているのが一四枚。描かれている見出し語の内、「伏姫と八房」以外は、見出し語1に対

し、一枚ずつ絵が描かれている。表紙、扉ともに伏姫と八房の絵が描かれており、本編でも、「伏姫と八房」で二箇所、「伏姫の死」で一箇所と、伏姫の下りに挿絵が多く割かれていることが確認できる。これはどういうことを表しているのだろうか。

カバヤ文庫の『里見八犬伝』と何か関わりがありそうなものはないかと探してみると、青葉山人編、土屋光逸画『八犬傳伏姫』（日本お伽噺、網島書店、明治四四年九月）があった。

土屋光逸は明治から昭和にかけての浮世絵師、版画家であり、カバヤ文庫のイラスト書きが、プロをめざしている画家であったなら、興味を持ってみた可能性が高い。

この青葉山人編『八犬傳伏姫』は題名の如く伏姫について書かれた話であり、もしもこれを参考にしたとなれば、カバヤ文庫の『里見八犬伝』の挿絵に伏姫の下りの場面が多いことも腑に落ちる。

そこで青葉山人編『八犬傳伏姫』（国立国会図書館国際子ども図書館所蔵本「Y8・N07・H656」）（図版A）とカバヤ文庫『里見八犬伝』（架蔵本）（図版B「次頁所掲」）を対照して比較してみると、よく似ていることが分かる。



【図版A】青葉山人編『八犬傳伏姫』表紙

（国立国会図書館国際子ども図書館蔵）

【図版B】カバヤ文庫『里見八犬伝』表紙（架蔵本）



表紙を見比べてみると、伏姫の目線、顔つき、髪型、伏姫の着物が似ている。伏姫の着物の色はどちらも赤色で同じであり、八房の首輪の色も赤で同じである。八房の体の模様の色合いも似ている。さらに背景にはどちらも山が描かれている。

次はカバヤ文庫『里見八犬伝』の本文挿絵一枚目（図版C）と青葉山人編『八犬傳伏姫』（図版D〔次頁所掲〕）を対照したものであり、洲の崎明神の場面である。

この場面は、管見に及んだ限り、他の児童向けの作品には描かれておらず、そのことから、カバヤ文庫の作者が『八犬傳伏姫』を参考にした可能性が高いと考えられる。

お付きの女性に連れられた伏姫に、白髪の老人である役の行者が加持祈禱をしている。

※（ ）内の数字は該当頁を表す。以下同様。

【図版C】カバヤ文庫『里見八犬伝』挿絵一（六）





最後はカバヤ文庫の挿絵三枚目、伏姫が自害する場面の挿絵（図版E）であるが、青葉山人編『八犬傳伏姫』の二枚の挿絵、岩室にいる伏姫と八房（図版F・G）からそれぞれ比較してみたい。

【図版E】カバヤ文庫『里見八犬伝』挿絵三（一七）



カバヤ文庫（図版E）の八房と『八犬傳伏姫』（図版F〔次頁所掲〕）の八房が似ている。耳の尖ったところや顔型がよく似ている。また、カバヤ文庫（図版E）と『八犬傳伏姫』（図版G〔次頁所掲〕）の伏姫の座っている姿の描き方が似ている。

【図版F】青葉山人編『八犬傳伏姫』（二四）



【図版G】同（三一）



以上のことからカバヤ文庫の作者は青葉山人編『八犬傳伏姫』の土屋光逸の絵を参考にしようである。

では、土屋光逸は『八犬傳伏姫』の挿絵を描く際に何か参考にしたものがあつたのであろうかと探してみると、二点ほどあつた。

一点目は、鈍亭魯文作・直政（歌川直政）（外・口絵）・一盛齋芳直（歌川芳直）画『英名八犬士』全八編（伊勢谷忠兵衛版元、安政二〜三年）のうち、初編。

二点目は、二代目爲永春水・鳳簫菴琴童・假名垣魯文作、一勇齋國芳（歌川国芳）・一恵齋芳幾（落合芳幾）画『仮名読八犬伝』全三編（丁子屋平兵衛／広岡屋幸助版元、弘化五（嘉永元年）〜慶応四年）のうち、第二編である。『英名八犬士』の魯文は、『仮名読八犬伝』の作者の一人でもある。

まずは、歌川直政画『英名八犬士』初編の表紙（人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵本「ナ4・680・1」、※二次使用を禁ずる）（図版H（次頁所掲））を、カバヤ文庫『里見八犬伝』及び青葉山人編『八犬傳伏姫』の二点の表紙（図版A・B）と比べてみてほしい。非常によく似ていることが分かる。

【図版H】鈍亭魯文『英名八犬士』初編・表紙

(人間文化研究機構 国文学研究資料館蔵)



カバヤ文庫『里見八犬伝』(図版B)、青葉山人編『八犬傳伏姫』(図版A)の表紙と構図が同じである。青葉山人編『八犬傳伏姫』に至っては、経典を持つところまで同じである。

さらに、伏姫がよく似ているばかりではなく、やはり左側に八房がぼんやりとはあるが、描かれている。三者ともに、八房は白地に斑がある。後述するが、原作の八房の顔は黒色である。

次にカバヤ文庫『里見八犬伝』(図版C)と青葉山人編『八犬傳伏姫』(図版D)の州の崎明神の場面を、歌川国芳画『仮名読八犬

伝』(人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵本「ナ4・10・1」、※二次使用を禁ずる)の同場面(図版I)と比較してみたい。

【図版I】二代目爲永春水『仮名読八犬伝』第二編

(人間文化研究機構 国文学研究資料館蔵)



とりわけ、青葉山人編『八犬傳伏姫』の絵(図版D)と酷似していることが確認できる。洲の崎明神の場面に限らず、『八犬傳伏姫』の挿絵は、『仮名読八犬伝』と比較してみると、全編を通して踏襲している様子が見受けられる。

明治以降の『仮名読八犬伝』はと言うと、佐藤至子によれば、「…明治期には藤田文苑堂が初編と三十一編を全十冊にして再摺した。三十一編は第百回の途中までを抄録して終わっている。未完ながらこの作品はそれなりに読まれ続けたようである。」²⁾とあり、『八犬傳伏姫』(明治四四年刊)を描いた土屋光逸が見ることは十分可能である。

『八犬傳伏姫』の本文終わりには、「^{日本}お伽 伏姫の巻(をわり)」と書かれており、シリーズの第一弾として考えられていたことが確認できる。『八犬傳伏姫』はお伽噺であり、原作の挿絵にはない絵をも描く必要があり、シリーズの予定であったために、土屋光逸はその後も多くの原作にはない挿絵を描いていく必要があった。

そんな中、浮世絵師である土屋光逸は、同じく浮世絵師である、歌川直政、歌川国芳の絵を参考としたのではないかと考えられる。『仮名読八犬伝』は草双紙であり、全編に挿絵が入っているし、全三十一編という長篇だから、かなりの量の絵が描かれている。

話をここで一度戻す。『八犬傳伏姫』の本誌は『仮名読八犬伝』を元に描かれていると考えられるとして、では、カバヤ文庫『里見八犬伝』(図版B)及び『八犬傳伏姫』の表紙(図版A)の参考に

なっただと思われる、鈍亭魯文『英名八犬士』初編の表紙(図版H)は何を元に描かれたのかについて、今度は探ってみよう。似たものがないかと探してみたところ、大錦絵「八犬伝犬の草紙の内 里見息女伏姫」(歌川國貞画、嘉永五年)があった。

大錦絵「八犬伝犬の草紙の内 里見息女伏姫」(個人蔵²⁾) (図版J)と『英名八犬士』初編の表紙(図版H)は構図が同じである。

【図版J】 大錦絵「八犬伝犬の草紙の内 里見息女伏姫」

(個人蔵)



伏姫が経を持っているところも同じである。

土屋光逸がこの錦絵(図版J)を参考にしたとも考えられなくはないが、『英名八犬士』表紙(図版H)の方が、『八犬傳伏姫』の表紙(図版A)に近い。

伏姫の顔だけでなく、左側に八房が描かれていることやこの大錦絵(図版J)の伏姫には首に数珠がかかっているものの、カバヤ(図版B)、『八犬傳伏姫』(図版A)の二作には描かれておらず、『英名八犬士』(図版H)を参考にしようである。

そして、『英名八犬士』表紙(図版H)は、大錦絵「八犬伝犬の草紙の内 里見息女伏姫」(図版J)を参考に描かれていると考えられる。服部仁によると、「八犬伝犬の草紙」は、合巻『雪梅芳譚犬の草紙』をもとに、その登場人物を役者似顔の大首絵として描いた作品で、…目録を含めた51枚のシリーズである²³⁰。」という。

つまり、この大錦絵「八犬伝犬の草紙の内 里見息女伏姫」(図版J)の元はというと、笠亭仙果作・三代目歌川豊国等画『雪梅芳譚犬の草紙』(松坂屋太平治/葛屋吉蔵版元、弘化五(嘉永元年)〜明治一四年)全五六編である。

岩田秀行、小池章太郎「役者絵を読む(三)」は、大錦絵「八犬伝犬の草紙の内 里見息女伏姫」について、『雪梅芳譚 犬の草紙』第四編に類似のポーズがあることを指摘している²³⁴。

『仮名読八犬伝』と『雪梅芳譚犬の草紙』は江戸期を代表する二人人気ダイジェストである。これら草双紙の存在によって、読本『南総里見八犬伝』は一般に普及し、『八犬伝』受容に多くの影響を与えている²³⁵。そしてこの二作品は基本的には原作に基づいて描か

れている。

佐藤至子は「原典の挿絵に基づきつつ、構図を変えるなどの工夫が施された挿絵は『仮名読』にも『犬の草紙』にも見られる²³⁶。」と述べている。今回の挿絵の伏姫及び洲の崎明神の挿絵も原作(八戸市立図書館所蔵本「南15・86・(1・107)」)を参考に描かれている様が見受けられる。

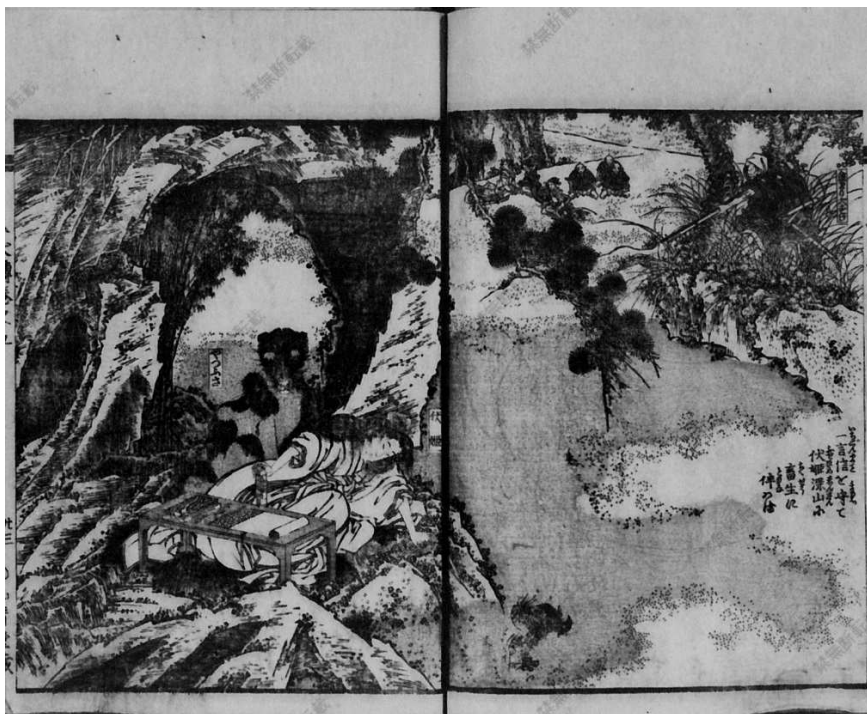
特に洲の崎明神の場面は、原作では一枚の絵の一部分であるもの(図版K・L〔次頁所掲〕)を『仮名読八犬伝』では一枚の挿絵にしている(図版I)。

原作では、伏姫は経典を持つのではなく、書いている。そして、八房の顔は黒色である。

※原作では、左上に洲の崎明神の場面が描かれている。



【図版K】『南総里見八犬伝』第一輯卷之四（八戸市立図書館蔵）



【図版L】『南総里見八犬伝』第一輯卷之四（八戸市立図書館蔵）

以上、挿絵の典拠に関する調査の結果を整理すると、以下の通り。

五、読者欄への投書

(表紙) 『英名八犬士』 ↓ 大錦絵 ↓

↓ 『雪梅芳譚犬の草紙』 ↓ 原作

カバヤ文庫 ↓ 『八犬伝伏姫』 へ

(底本) 『仮名読八犬伝』 ↓ 原作

簡略化してジャンルで記すと、次の通り。

カバヤ文庫 ↓ お伽噺 ↓ 錦絵・ダイジェスト ↓ 江戸期二大ダイジェスト ↓ 原作

挿絵は、江戸期の二大ダイジェストを経て、原作へと辿り着いた。

馬琴が大人向けに真面目に書いた読本である、『八犬伝』が近代児童書へと流れ着くまでに、女子供でも読め、挿絵の多い草双紙を通過していくのは、当然といえば当然かもしれない。

再話の内容についても、考え得る一番一般的な流れを辿っているといえる。(カバヤ文庫 ↓ 児童向け全集 ↓ ダイジェスト ↓ 原作)

いずれにしても、本稿の調査結果によって、カバヤ文庫の再話の内容、挿絵から、原作から近代児童書までの受容の一連の流れを知る、一つのモデルケースを知ることが可能となった。

本章では、話をカバヤ文庫に戻して、今度はカバヤ文庫から垣間見られる享受の側面について考察をしていきたい。

カバヤ文庫には読者欄「町から村から」という頁が巻末にあり、読者から寄せられた投書が紹介されている。本稿では、その投書の中から、『里見八犬伝』について寄せられたものを紹介すると共に、読者欄を調査するに当たって分かったことをまとめた。

読書欄を調査するに当たっては、岡山県立図書館のホームページ、デジタル岡山大百科「カバヤ文庫²⁷⁾」にて公開されているものを対象とした。尚、岡山県立図書館には、全てのカバヤ文庫が揃っているわけではない。

所蔵があるのは、カバヤ文庫の他、同じくカバヤ文化研究所発行のカバヤ・マンガブック、カバヤ・パズルえほん、カバヤ・人形えほんの四種類、計一七四冊である。

その内、読者欄があるのは、カバヤ文庫とカバヤ・マンガブックの計一七二冊。

その一七二冊の「町から村から」を調査したところ、『里見八犬伝』に関する投書があるものは、六冊七通であった。

各当初の一部分を次頁にてそれぞれ紹介していきたい²⁸⁾。

次の六冊は、いずれもカバヤ・マンガブックの読者投稿欄「町から村から」の引用である²⁹⁾。

カバヤ文庫『里見八犬伝』に関する投書（「町から村から」より）

① 第24号『カバ太郎大あばれ』（昭和二十八年二月）

僕が今日父と将棋をしているとカバヤの本が僕の所につきました。僕は風雲源平合戦をもらおうと思っていました。父がまあ里見八犬伝を読んでみなさいと言ったので送つてもらいました。

四・五・六年生用ではありませんが、中学の僕が読んでもおもしろかったと思います。（中学一年）

② 第28号『ハーモニカ』こぞう（昭和二十八年二月）

…ぼくは今までに本全部で10冊になりました。

「里見八犬伝」は特別に役に立ちました。滝沢馬琴のことをならっていましたので、学校でもひっぱりだこでした。ほんとうにありがとうございます。心からお礼申し上げます。（中学一年）

③ 第29号『ボンちゃんカコちゃん大かつやく』（昭和二十八年二月）

僕は、里見八犬伝と黒覆面の騎士を取りかえた。いつも同じ所のでかえるので、カバの体になるよとわらわれました。

学校へいくと、カバヤの券をもっていない者は、ほとんどいない。僕の近所にも、六さつも七さつももっている人がいる。おもしろいなあ、カバヤの本は、よんだらやめられない。（六年）

④ 第30号『カバちゃんキャラちゃんわんぱく日記』（昭和二十九年一月）

今、僕たちのクラスではカバヤ文庫のカードを集めるのに競争しています。お母さんがおやつになにをあげましょうかねと困っている時にはすぐにカバヤキャラメルと誓ってきめてしまいます。それから点数をためていまでは「黒覆面の騎士」と「剣豪ダルタニヤン」と言う本を本社からもらい今では近くの店で「里見八犬伝」と「断頭台の司令官」「怪人二面相」「ニルスの不思議な旅」等をかえてよみました。近所の友達やクラスのもののがうらやましがっています。（六年）

⑤ 第39号『かんちゃん』（昭和二十九年三月）

ぼくは「孫悟空大暴れ」と「マンガクラブ」を送っていたきました。

今度は「里見八犬伝」と「三銃士」と「宝島三勇士」と送っていたきみんなで五冊になりました。家の妹や弟や姉までもひっぱり合つてよんでいます。

お父さんもお母さんも「たいへんいい本だ。」といってほめてくださいました。

「カバヤ」の本はよみはじめるとおもしろくてやめられませんか。お母さんが「今度また集めて送っていただくように。」といつています。(五年)

⑥ ⑤と同じ。

僕の家では兄弟三人が競争でためています。僕は「怪人二面相」「人造人間モンスター」次の弟は「隊長ブーリバ」「里見八犬伝」下の弟は「牛若姫」「甘辛兄弟」をそれぞれもらいました。おいしカバヤキャラメルをしやぶりながら、三人共夢中で読んでおります。(中学二年)

⑦ 第48号『珍アリババ物語』(昭和二九年五月)

僕は、八月頃から点数やカードをためました。今では五さつ持っています。その中でも、昔の日本のお話を書いてある「里見八犬伝」のような本が好きです。家の者もそういう本がもつと沢山出ることをきたいしております。(不明)

以上、この投書から分かることは、「小学校五年〜中学校二年の男子生徒」が『里見八犬伝』に関する投書を送ってきていること、

内、その実際の本の所蔵者は「小学校五年〜中学校一年の男子生徒」である。

投稿者の学年と人数

不明	1人
中学2年	1人
中学1年	2人
小学6年	1人
小学5年	1人

所蔵者の学年と人数

不明	1人
中学2年	0人
中学1年	3人
小学6年	1人
小学5年	1人

表に整理してまとめると、中学一年生の所蔵者が多いことがわかる。それは、投書②に「滝沢馬琴のことをならっていただけなので、学校でもひっぱりだこでした。」とあるように、学校で習うことと関係しているかもしれない。

坪内によれば、カバヤ文庫は「最低の本で五万部、人気のあった本は五十万部も出たと言う³⁰⁰。」が、実際のところ、『里見八犬伝』がどの程度出回ったかを知る由はない。

その後、カバヤ文庫はマンガ・ブックを出したことで、子供の人氣がマンガに移ったことと、学校や親からの支持が得られなくなったことで終焉へと向かっていった³⁾。

坪内は、「その終焉の日付も正確にはわからないが、「カバヤマンガブック」が出はじめて間もない昭和二十八年の終わりごろであった³⁾。」と述べている。

実際、岡山県立図書館の「カバヤ児童文庫 書名リスト³⁾」を見てみると、未所蔵の物から見られる傾向として、人氣がなくなってきた後半部分の作品と投書によく出てくる非常に人氣があったと思われる作品がないことに気が付いた。

尚、岡山県立図書館は、県民に呼びかけて、カバヤ文庫の収集、保存に取り組んでいる。

- 岡山県立図書館にて未所蔵の作品(第一巻〜第九巻中)
- ・『ロビンフッドの冒険』(第一巻第一二号、昭和二十七年十月)
 - ・『ロビンソン漂流記』(第二巻第一二号、昭和二十八年一月)
 - ・『隊長ブーリバ』(第三巻第一二号、昭和二十八年四月)
 - ・『おおかみと子やぎ』(第四巻第一号、昭和二十八年四月)
 - ・『まぶたの母いずこ』(第八巻第八号、昭和二十八年一月)
- ※第五、六、七、九巻は全揃い。

次は、後半部の第十巻〜第十三巻のうち、所蔵しているものを表にしたものである。(各15冊中、所蔵がある冊数。)

徐々に減っていつているのが確認できる。第一三巻に至っては、所蔵数はゼロである。第十巻第二号『空とぶカバン』が発行されたのが、昭和二十八年一月二〇日であるから、前述の坪内が言う、「カバヤ文庫の終焉」の始まりと重なる。

岡山県立図書館所蔵(各15冊中)

第一三巻	0冊
第一二巻	1冊
第一巻	6冊
第十巻	10冊

この結果から伺えることは、『里見八犬伝』は、特別人氣があるわけでも人氣がないわけでもないということである。

ただ、カバヤ文庫は第一二巻(全部で一五九号)まで出されておき、『里見八犬伝』が第六巻第二号に発行されたことを照らし合わせれば、投書数が6冊に7通あるということは、比較的人氣があった証であるといえるだろう。

カバヤ文庫の日本のものは、次の六作品。

六、おわりに

『たけとり物語』（第二号第一巻、昭和二十七年十月）
『安寿姫』（第三巻三号、昭和二十八年二月）
『風雲源平合戦』（第五巻第三号、昭和二十八年七月）
『里見八犬伝』（第六巻第二号、昭和二十八年四月）
『おむすびころりん』（第九巻第七号、昭和二十八年八月）
『耳なし芳一』（第一一巻第一二号、昭和二十九年三月）

投書を見た限り、日本のものの中では、男子生徒には『風雲源平合戦』が、女子生徒には『安寿姫』の人氣があつた。その二つに關しては、次にそれがほしい、読みたいといった声も多かつた。

そこまでの人氣は見受けられないものの、その次に投書が多かつたのは、男子生徒には『里見八犬伝』、女子生徒には『たけとり物語』である。あとの二作品は發行が遅かつたということも考えられるが、投書が少なかつた。

全体の印象としては、『里見八犬伝』はそこまでの人氣はないものの、比較的安定した人氣があるように見受けられた。また、先生の評判も良く、家族で読める良書といった印象も受けた。

架蔵本『里見八犬伝』には、この本の持ち主であつたと思われる子供の名前の一部とおぼしき「にしおかじ」という文字が黒のマーカでしっかりと書き込まれている。この本の元の持ち主が、カバヤ文庫『里見八犬伝』を大切に所持していたことは確かであろう。

本稿ではお菓子のおまけであるカバヤ文庫『里見八犬伝』の再話内容、挿絵の特徴とその典拠について遡及して考察した。

その結果、近世文学から近代児童書への一連の流れを知る一つのモデルケースを知ることが出来た。カバヤ文庫はお菓子のおまけでありながら、原作の末裔としてのその姿をしっかりと表してくれたのである。さらに、読者欄から当時の『八犬伝』の享受の一端を知ることが出来た。

カバヤ文庫は昭和二〇年代に子供であつた人々に楽しみを与えるたのみならず、『八犬伝』受容史を明らかにする上で、貴重な情報を与えてくれた。

今回の研究を終えて、改めて感じることは、近世期の草双紙にしても、近代の児童向け『八犬伝』にしても、『八犬伝』の子孫たちには、原作と変わらず人々を魅了する力があるということである。今後は引き続き、カバヤ文庫以外の近代児童向け『八犬伝』の特徴、典拠を見ていくと共に、『八犬伝』が支持されるその理由についても考えてみたい。

付記

引用の際、圈点やルビを適宜省略した。傍線、「…」(省略)は全て引用者による。

本稿の図版掲載に当たって、国立国会図書館国際子ども図書館・人間文化研究機構国文学研究資料館・八戸市立図書館・サイト「浮世絵

「ぎやらしい」管理人様よりご所蔵の資料の掲載許可を頂きました。お礼申し上げます。

最後に、論者はこれまで専ら近代文学の研究をしてきたので、近世資料の取り扱いに思わぬ不備があるかもしれない。誤り、未見の資料等については広くご教示頂きたいと思う。

注

¹ 岡長平『カバヤ文庫覚え書き』（私家版、平成二年八月、一頁）によると、第一巻の一二冊は「カバヤ児童文庫」と表示があり、第二巻以降は「児童文庫」と表示されているという。本稿では通称名である「カバヤ文庫」を用いた。

² 坪内稔典の類推数。

坪内稔典『カバヤ文庫の時代』坪内稔典コレクション第1巻、沖積舎、平成二三年十月、七〇頁

³ 坪内稔典「カバヤ文庫」（高橋洋二編『おまけとふろく大図鑑 子どもの昭和史』別冊太陽、平凡社、平成二一年二月、四六頁）

⁴ 以下、カバヤ文庫からの引用は、末尾に頁数のみ記す。

⁵ 坪内稔典『おまけの名作 カバヤ文庫物語』（いんてる社、昭和五九年十月、後に『カバヤ文庫の時代』坪内稔典コレクション第1巻、沖積舎、平成二三年十月に収録。）が出版された後に、岡山県立図書館はカバヤ文庫の収集を始めている。

坪内『おまけの名作 カバヤ文庫物語』が出版されるまでは、カバヤ文庫が目されることはなかった様子が伺える。

⁶ 則枝広之『文庫びっくり箱』青弓社、平成一三年九月、五七、五八頁

⁷ 坪内稔典『カバヤ文庫の時代』坪内稔典コレクション第1巻、沖積舎、平成二三年十月、三七頁

⁸ 坪内は『シンデレラひめ』の「はしがき」（伊吹武彦、京都大学教授）の「二千万の日本の少年少女」とか、「学校の先生がたにも、お父さんお母さんがたにも、きつとご推賞（まほ）を受けるよい読みもの」

という語が製作者の意向と合うこと、また編集者の書いたあとがきにある「ニッポンの二千万人の子供さん」、カバヤ文庫のキャッチフレーズ「二千万児童に珠玉のような名作を」と共通していること（注2前掲、三七、三八頁）を指摘している。

⁹ 前掲注2、一七頁

¹⁰ 原敏「無名作家の名作」（高橋洋二編『おまけとふろく大図鑑 子どもの昭和史』別冊太陽、平凡社、平成二一年二月、五〇頁）

尚、カバヤ文庫の作者の中には後日プロの作家になったものもいるという。

¹¹ 前掲注10、同頁

¹² 前掲注10、同頁

¹³ 前掲注2、一七頁

¹⁴ 前掲注2、一七頁

¹⁵ 岡長平『カバヤ児童文庫と世界の名作児童文学』私家版、平成二二年二月、はじめに

¹⁶ 「岩波書店 (wanami Shoten) / 岩波少年文庫 (Wanami Shonen bunko) 1950 - 1

(<http://homepage1.nifty.com/ta/Oa/wanami/shonen.htm>

2013.10.14 初回アクセス)

¹⁷ 以下、加藤武雄「里見八犬傳」からの引用は、末尾に頁数のみ記す。

¹⁸ 所蔵が確認できるものに関しては、大方確認をした。

以下、未見のものを記す。

吉田助治編『里見八犬傳』上巻、児童図書館叢書第34篇、玉川学園、昭和二年

国立国会図書館の蔵書検索システムでは、国立国会図書館関西館に所蔵となっているものの、現在は紛失中とのことで、確認ができなかった。

¹⁹ 以下、藤川淡水『お伽八犬傳』からの引用は、末尾に頁数のみ記す

²⁰ 前掲注10、同頁

²¹ 佐藤至子『雪梅芳譚犬の草紙』と『仮名読八犬伝』（諏訪治夫・

高田衛『復興する八犬伝』勉誠出版、平成二〇年二月、四一八頁）

²² サイト「浮世絵ぎやらしい」内、「八犬伝 伏姫」

(<http://ukiyo.e.wafusozai.com/archives/20/10> 2013. 10. 30 初回アクセス)

²³ 服部仁解説「2―義の巻 錦絵「犬の草紙」にみる八犬伝の登場人物たち―」（千葉市美術館編『八犬伝の世界』平成二〇年）内、「28 大錦絵 八けん伝 犬の草紙之内（目録）」（四四頁）

²⁴ 岩田秀行、小池章太郎「役者絵を読む」（『跡見学園女子大学国文学科報』第23号、平成七年三月、八六、八七頁）

²⁵ 千葉市美術館 田辺昌子解説「1―仁の巻『南総里見八犬伝』の誕生と曲亭馬琴」（千葉市美術館編『八犬伝の世界』平成二〇年）内、「19―1 笠亭仙果作 三代目歌川豊国等画『雪梅芳譚 犬の草紙』」（三四頁）参照。

他、この二作が『八犬伝』の普及に貢献したことについて、向井信夫『江戸文芸叢話』八木書店、平成七年や、林美一『秘坂・八犬伝』緑園書房、昭和四〇年がある。

²⁶ 前掲注19、四一九頁、注10

²⁷ デジタル岡山大百科「カバヤ文庫」

(http://digitaloka.libnet.pref.okayama.jp/fo1list-jp/kyo/M20040701121531100_00 2013. 10. 14 初回アクセス、10/19, 20, 26 アクセス)
²⁸ 引用に際し、住所、学校名、名前は省略した。投書内容の一部及び学年のみ載せた。学年は引用の最後に括弧書きで記した。

²⁹ 引用に際し、カバヤ・マンガブックは省略し、号数以下を記載した。

³⁰ 前掲注2、一五頁

³¹ 前掲注2、六九、七〇頁

³² 前掲注2、七〇頁

³³ 「カバヤ児童文庫 書名リスト」

(<http://www.libnet.pref.okayama.jp/news/h24/booklist/news1128-list.htm> 2013. 10. 14 初回アクセス)

「お菓子のおまけ カバヤ文庫『里見八犬伝』—典拠は何か—」(『研究と資料』第七十輯、二〇一三年十二月)

《正誤表》

頁	段行数等	誤	正
P 104	下段 2 行目	土屋光逸の絵	土屋光逸 (表紙)、山本研山 (本文中) の絵
P 104	下段 3 行目	土屋光逸	両者
P 105	上段 14 行目 ※《補足》参照	土屋光逸	山本研山
P 105	上段 16・17 行目 ← 上段 10 行目の後	上段 16・17 行目の全文	上段 10 行目の後に移動

《補足》

『八犬傳伏姫』の表紙の絵は土屋光逸が描いているが、本文中の挿絵は全て山本研山が描いている。

P 105・上段・14 行目では本文中の挿絵について述べているので、山本研山とすべきであり、論述は誤りであった。